

本発表では、浄土真宗の宗祖・親鸞（1173-1262）が、「日本」をどのように認識していたか。また、自らの信仰や思想を語る上で、「日本」という場の特性を感じ取っていたかどうか。これら2点について考察したい。

親鸞が書き残した書物に、「日本」という語、あるいはそれを意味する言葉はそれほど多くない。まず「日本」という語は、師法然の出世を讃嘆する和讃に見られる。

本師源空世にいでて 弘願の一乗ひろめつつ

日本一州ことごとく 浄土の機縁あらわれぬ（『高僧和讃』源空讃）

また、聖徳太子を讃仰する中に「日本国帰命聖徳太子」（「皇太子聖徳奉讃」）「大日本国粟散王聖徳太子」（「大日本国粟散王聖徳太子奉讃」）「妙教流通東方日本国」（『尊号真像銘文』）という表現を確認できる。聖徳太子に関しては、「和国の教主聖徳皇」（「皇太子聖徳奉讃」）など「和国」という言葉も見られる。

次に、日本が粟粒をまき散らしたような小国であることを意味する「粟散」という言葉であるが、これも法然と聖徳太子の箇所に見られる。

粟散片州に誕生して 念仏宗をひろめしむ

衆生化度のためにとて この土にたびたびきたらしむ（『高僧和讃』源空讃）

「粟散王」ともうすは、このくにはきわめて小国なりという。粟散というは、あわつぶをちらせるがごとくちいさきくにの王と聖徳太子のなせたまいたるともうしけるなり。（『尊号真像銘文』）

また、辺州すなわち辺境と同義である「片州」という言葉も用いられるが、上記の和讃以外にも例えば次のように述べられる。

真宗の教証、片州に興す。選択本願、悪世に弘む。（『教行信証』「行巻」）

真宗の教証、片州に興ず、選択本願、濁世に施す。（『浄土文類聚鈔』）

ここに片州の愚禿、印度西蕃の論説に帰し、華漢・日域の師釈を仰いで、真宗の教行証を敬信す。（『浄土文類聚鈔』）

善導源信すすむとも 本師源空ひろめずは

片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとらまし（『高僧和讃』源空讃）

このほか「和朝」（『高僧和讃』『尊号真像銘文』）や、晩年の消息には「朝家」「鎌倉」「六波羅」という言葉も見られるが、いずれも親鸞の「日本」観が窺われるような格別の意味はないと思われる。

以上のように、「日本」もしくはそれを意味する言葉を、そしてそれらが使用される文脈を確認すると、いくつかの点を確認することができる。まず親鸞は、日本は粟散国であり、インドや中国と比べて片州であると了解していた。そして、その日本に仏教、就中、浄土真宗を弘めたのが聖徳太子であり法然であると、感動をもって讃嘆したのである。

次に、親鸞が「片州」という言葉とともに「濁世」「悪世」と述べている点に注目したい。親鸞は『教行信証』「化身土巻」で、『大集経』によって「当今は末法なり。この五濁悪世には、ただ浄土の一門ありて通入すべき路なり」と確認している。この五濁悪世においてこそ浄土真宗が興隆するのであり、それは片州たる日本国にほかならないのである。したがって親鸞の「日本」観は、時機の問題として捉え直すことができるであろう。